

## フェミニズムと党派性：アメリカの女性運動と政党

相内真子\*

### 抄 訳

現代のアメリカのフェミニズムは、ベティ・フリーダンの主張した「社会の主流への女性の完全な参加」を目標に、公的な政治の舞台に躍り出た。1980年以降、選挙と政党政治が、その運動戦略の中心となった。民主党と共和党のイデオロギーや政策の相違がますます明らかになり、二極化が進行するにつれて、フェミニストは民主党との連携を深めていく。しかし、こうした一体化は、弾劾裁判でクリントンを擁護するという思わぬ結果を招いた。フェミニズムが党派性から自由であるための行動の選択肢は、まだ見つけられていない。

はじめに

#### 1 アメリカのフェミニズムと政党

- (1) 政党と女性
- (2) 女性組織の設立
- (3) 路線をめぐる対立

#### 2 フェミニズムと党派性

- (1) 超党派的アプローチ
- (2) 女性PACと選挙
- (3) 民主党への接近
- (4) クリントン政権と女性

おわりに

註及び引用・参考文献

### はじめに

現代のアメリカの女性運動の特徴は、選挙政治・政党政治にプライオリティをおく点に

ある。たしかに、女性が選挙や政党活動に参加するのは、決して最近のことではない。政党には「女性部」があり、党の宣伝活動や選挙資金集めのために「(切手を)舐めて(封

---

\*北海道浅井学園大学人間福祉学部生活福祉学科

キーワード：フェミニズム，選挙政治，政党，党派性

筒に) 貼る」(Lick and Stick)<sup>(1)</sup>といったボランティアとしての仕事には、多くの女性が関わってきた。しかし、今日みられるような女性と政党との関わりは、1960年代後期に始まる第二波フェミニズムにおける女性運動の動員に始まる。そして、「社会や政治における女性の居場所」をめぐるフェミニズムの議論は、意識高揚グループや小規模のフェミニスト・プレスから、公的な政治の場へと舞台を移したのである。

政治社会への女性の統合を、「性の平等」を確立するための不可欠の要素とみるリベラル・フェミニズムは、これまでも、そして現在も、アメリカ・フェミニズムの主流である。そして、この立場には二つの大きな前提があるように思われる。一つは、「国家はフェミニストにとって敵ではない」<sup>(2)</sup>という、もう一つは、「国家権力の性格は、女性が男性と権力を分かち合えば変わり得る」<sup>(3)</sup>という信念である。選挙政治や政党政治への参入も、この前提に基づく戦略と捉えてよいだろう。

他方、近代国家を女性抑圧の装置と見るラディカル・フェミニズムは、政党への女性の統合に懐疑的である。フェミニスト間の議論の中核にあるのは「政治エリート」の問題である。リベラル・フェミニズムは、女性の政治的代表を共通の利益とみる立場から、女性の政治エリートの形成を、運動の不可欠の一部であると主張するが、ラディカル・フェミニズムにとっては、エリートが非エリートを支配するという、権力行使のヒエラルキー構造そのものが、「根絶すべき抑圧」なのである。

ところで、政党がもつ機能の一つは、新し

い政治エリートの補充である。Baer & Bositis (1988) は、「政党は新エリートの出現を促進することにより、民主主義を発展させた」<sup>(4)</sup>と述べているが、この新エリートは、政治権力から除外されてきた歴史をもつグループから出現したとされ、合衆国の政治史に照らしてみれば、それは、女性やエスニック・マイノリティを指すと考えられる。すなわち、アメリカの政党の民主主義への貢献は、女性を新エリートとして受容しようとしたことにあるといえよう。

しかしながら、ラディカル・フェミニズムは、新エリートとなった女性が、主流の政治の中で女性の利益を実現できるかどうかについて懐疑的である。Duverger (1954) や、Michels (1962) は、政党内では、その出自に関わりなくエリートはエリート階級を形成し、また新エリートは旧エリートとの対決を避ける傾向をもつため、結局「権力の全面的な委譲」はおこらないと指摘する<sup>(5)</sup>が、ラディカル・フェミニズムも、女性が権力的な地位に就くことは危険な“co-optation (とりこまれること)”であり、女性の政党への参入は、男性政治への「同化」に過ぎないと批判してきた<sup>(6)</sup>。

小論では、選挙政治や政党政治との関わりを深めていくアメリカのフェミニストたちの行動を、現代史の文脈で追いながら、その政治的ゴールの実現、あるいは挫折のプロセスを考察する。

## 1 アメリカのフェミニズムと政党

### (1) 政党と女性

現代のアメリカのフェミニズムは、選挙や政党との関わりにその活動の多くを割いてい

る。こうしたいわば「公式の政治」への接近と積極的な参入は、前述したように、フェミニスト間に対立を引き起こしてきた。連邦レベルの政治への女性の統合は、1920年の憲法修正第19条による参政権の付与によって実現したが、参政権要求運動を展開した第一波フェミニズムの指導者たちの中には、女性が政党に参入することによって政治改革がより効果的に進行すると主張するグループもあれば、他方、そのような戦略こそが女性の分断と男性による搾取を引き起こすと批判するグループもあった。前者が多数を占め、リベラル・フェミニズムとして、以後のアメリカのフェミニズムの主流を形成することになる。

フェミニスト間の路線を巡る対立と論争はこの後も続いたが、1970年代になると、主流派は選挙政治に深く関与するようになり、特に連邦議会への女性の選出を、運動の主要な目標に掲げるようになった。ラディカル・フェミニズムも活動を続けていたが、組織的には小規模に留まり、レイプ・クライシス・センターや虐待を受けた女性のためのシェルターの運営など、より「草の根」的な活動に専念するようになっていた。

政党を含む権力構造の中に女性を統合し、より多くの女性を公職に選出し、それによって政治課題を実現することが、リベラル・フェミニズムの目的であり手段となった。しかし、リベラル・フェミニズムというイデオロギーだけでは、選挙政治や政党政治との深い関わりを説明することは難しい。すなわち、女性組織などのアウトサイダーが接近しやすい、受容的な政党構造が指摘できるのであり、それは概して、アメリカの政党メカニズムの緩やかさであるとされる。

小論は、候補者の出馬プロセスの検証を目的とするものではないため、詳細には立ち入らないが、アメリカの政党は、ヨーロッパの多くの政党や日本の政党と異なり、全国政党としての拘束力をもたない特殊な存在である。その特殊性を際立たせているのが、候補者選考プロセスと政党組織の「分権制」,「分立制」である。まず、アメリカの政党は、党の公認候補として誰を指名すべきかをコントロールするメカニズムをもたない。よく知られているように、予備選挙制度は、候補者の選考過程への政党の介入を排除したし、また有権者登録を済ませてさえいれば、選挙民は、党员でなくても特定の政党の候補者を指名することができる。すなわち、ヨーロッパ諸国の政党や日本の政党が、候補者選考において果たす「ゲートキーパー」としての役割を、アメリカの政党はもっていない。

アメリカの政党のもう一つの特徴は、連邦制の下で「分権化」され、地方・州・連邦の各レベルで、政党がそれぞれ独立した存在として機能することである。大統領と連邦議会の「政府の分立」も、それぞれの公選職の周囲に、相互に連携しない独立した補充グループを形成してきた。有権者の投票指標としての政党の役割も弱まっている。有権者は政党にこだわらずより独立的に判断するようになり、公選職毎に、異なる政党の候補に投票する“split voting (分割投票)”が増えているのである。

さらに、連邦議会に選出された個々の議員に対し、ある法案への支持あるいは不支持を政党が指示する、いわゆる「党議拘束」がかけられることはほとんどない。すなわち、アメリカの政党は、他の民主主義諸国の政党に

比べて、その拘束力は格段に小さいといえるだろう。逆にいえば、それだけ開放的であり、透明性もあるといえる。こうした政党の特徴が、新参者やアウトサイダーの参入に、比較的寛大な文化を形成してきたと考えられるのである。

アメリカの政党が政党としての一体感を党員に与えることができるのは、党の綱領を改訂し、大統領候補を正式に指名する、4年に1度の全国党大会であろう。各州から選出された代議員が参加する党大会は、指名候補については、予備選挙の結果を承認するセレモニー的側面が強いが、綱領については、代議員間で意見が対立する場合もある。後でみるように、アメリカの女性組織は、政党に接近する過程で、代議員中の女性比率を増やすよう政党に求めてきた。それは、政党における女性の存在を、公的な場でよりヴィジブルなものにすること、女性の権利に関わる文言が綱領に含まれる（あるいはそれから脱落しない）よう監視することの、二つの目的のためと考えられる。

## (2) 女性組織の設立

現代のアメリカのフェミニズムのルーツは、1960年代初期に始まった一連の社会的抵抗運動に求められる。合衆国におけるこの大規模な抵抗運動の契機は、公民権運動であり、南部州の人種隔離政策に対するこの挑戦は、北部の活動家を引き寄せた。また、60年代後半の政府によるベトナムへの軍事介入は、その徴兵政策が大学キャンパスに及ぶや否や、全米規模の反戦運動を引き起こした。様々な運動の中から、“Question Authority = 権威を疑え”と主張する対抗文化が生まれ

た。さらに、抵抗運動や対抗文化運動の中にさえ、セクシズムが存在することに気付いた女性たちの間から、解放運動がおこり、これが第二波フェミニズムに発展したのである。

一方、1963年には、ベティ・フリーダンが「女らしさの神話」を著し、伝統的性役割規範の非合理性を訴えた。ケネディ政権下の「女性の地位に関する大統領諮問委員会」が報告書を出し、各州にも知事による同様の諮問委員会が設立されるなど、この時代は、社会改革に参加することの意義と手ごたえを、フェミニズムに与えたのである。

1966年には、NOW (National Organization for Women = 全米女性機構) が設立され、ベティ・フリーダンが会長に就任した。NOWは、BPW (Business and Professional Women), AAUW (Association of American University Women), YWCA (Young Women's Christian Association) など他の女性組織と連携し、性差別的法律や慣行を撤廃するよう、政府に対するロビイングを熱心に行った。しかしながら、初期のNOW内には、こうした活動に対する異論があり、それが激しい対立を引き起こしていた。

この対立は、既に触れた、リベラル・フェミニズムとラディカル・フェミニズムの対立である。すなわち、それは「女性を権力的地位に押し上げることを目標とするグループと、権力的地位そのものの撤廃こそ運動のゴールであるとするグループの対立」<sup>(7)</sup>であった。何人かのメンバーはNOWを離れたが、ERA (Equal Right Amendment = 男女平等憲法修正条項) 制定運動での協力関係を通して、両者は再び接近し、穏健派が過激派を吸収する形で、二者は合流することになった。

ところで、ERA運動が全米に展開する中、フリーダンは、女性運動が既にピークを過ぎ、「はっきりと政治的にならなければ運動は衰退する」と確信していた<sup>(8)</sup>。それはとりもなおさず、「女性自身が選挙政治・政党政治に参入する」という宣言に他ならなかった。事実、女性たちの多くは、陳情者として政治の周辺にしか居場所がないことに不満を募らせていた。フリーダンは、民主党、共和党のいずれとも排他的な関係を結ばず、超党派的アプローチを維持しようとした。

1971年、NOWをはじめ他の多くの女性組織の主要メンバーが参加して、NWPC (National Women's Political Caucus=全米女性政治評議会) が設立された。NWPCの設立は、フェミニズムが、政党政治や選挙政治に強力にコミットする重要な契機となった。NWPCは、超党派の組織であり、メンバーには、民主・共和それぞれの政党を支持する女性たちが加わった。NWPCの主要な目的の一つは、政党の女性たちが、それぞれの政党内で女性の選出や任命を主張し、それによって政党構造の改革を促し、政党を超えたフェミニスト候補の擁立と支援活動を可能にすることだった。

### (3) 路線をめぐる対立

当時のアメリカにおいて、フェミニズムが政党政治にその活動の場を見出そうとしたことには理由がある。詳述は控えるが、それは、1968年の民主党全国大会の大混乱と、その結果としての党改革の断行に関連する。民主党のこの改革は、女性を含む新しい勢力に、参加と発言の機会をこれまで以上に提供することとなった。他方、共和党において

も、民主党ほどの規模ではなかったが、党内改革が断行され、女性の統合が進んだ。こうした主要政党の変化を背景に、NWPCは、政党の女性たちやフェミニスト活動家を引き寄せたが、政党政治・選挙政治への女性運動の大きな傾斜に対し、ラディカル・フェミニストは再び批判を強めた。著名なフェミニスト作家、ロビン・モーガンは、「連邦議会に女性が1人増えても、女の基本的な生活が変わるわけではない」と、冷ややかであった<sup>(9)</sup>。

実際の運動方針をめぐるでも、二つの路線は対立した。フリーダンの目標は、NWPC内に政党を横断して女性を結集させ、女性を連邦議会に選出して女性問題の解決をはかることだった。他方、ベラ・アブザックやグロリア・スタイナムにとっては、社会改革のための女性の政治運動をつくり出すことが目標だった。すなわち、そのような運動の展開を通して、女性が「投票ブロック」を形成し、より多くの女性や少数者、他の代表されない人々を選出して、男性政治家を脅かすほどの力を獲得することだった。アブザックらは、公職を求める女性を支持するだけでは、「権力的地位にいる白人男性の中流階級エリートを、白人で中流階級の女性エリートにとって代わらせることにしかない」と反対したのである<sup>(10)</sup>。

NWPCの設立趣意書は、結局この二つの路線を統合した妥協案となったが、この対立は、1972年の民主党全国大会における大統領候補の指名問題で早くも顕在化した。アブザック派は、革新派候補の指名を優先させ、ジョージ・マックガバンの指名に成功したが、フリーダン派は、主要な課題は女性の選出で

あると主張し、女性のシャリー・チズムを支持したのである。フリーダンの「広範なイデオロギー層から女性を選出していく計画」と、アブザックの「女性運動を左翼的ポピュリスト運動の一部と位置づけ、民主党の中で存在感を示そうというプロジェクト」の対立は、Young (2000) が指摘するように、政治過程における女性運動の間に継続する緊張関係の一つになっている<sup>(11)</sup>。

すなわち、「女性を権力的地位におくことに本質的な価値をみる」フリーダンと、「女性運動の重要性を、フェミニストと非フェミニストを峻別する一貫したイデオロギーにみる」アブザックとの対立は、「女性であればどんな男性にも優先して支持するのか」、あるいは、「非フェミニストの女性に対抗して出馬するフェミニストであれば、男性でも、支持するのか」といった問として、選挙の度にフェミニストを悩ませている。

## 2 フェミニズムと党派性

1980年以降、選挙と政党政治が、女性運動の政治戦略のますます大きな中心部分になった。その理由として考えられるのは、一つには、ERA 運動の渦中で、議会における女性議員の存在の重要性がフェミニストたちに認識されたことである。すなわち、ERA は、連邦の上下両院を通過し、しかも批准期限の延長まで勝ちとりながら、あとわずか3州の批准が得られず挫折した。ERA を支持するフェミニストたちは、運動の渦中で反フェミニズムの強力な女性指導者、フィリス・シェラフリーが率いる“STOP ERA”の挑戦に遭遇したが、同時に、議会においては「女性が女性の利益を代表する」ことを発見し、立法

府における女性代表の重要性を認識したのである。次に、レーガン共和党政権が誕生し、大統領支持勢力の中に、新しい宗教右派が登場してきたことである。レーガン大統領の再選も、女性運動の戦略と党派的志向に決定的な影響を与えたといえよう。

### (1) 超党派的アプローチ

超党派的立場を維持する NWPC 内には、民主党支持者によるタスク・フォース (DTF) と共和党支持者のタスク・フォース (RTF) がつくられ、これらはそれぞれの政党内で、全国党大会に出席する代議員中の女性比率を増やすよう要求してきた。両タスク・フォースは、1976年の党大会前に共同記者会見を開き、民主党・共和党とも、代議員中の女性比率が低いレベルに留まると批判した。この戦略は、メディアの関心をひき、その結果、代議員中の女性比率は向上した。

NWPC が、主要政党内で活躍し成功したことは、他の女性組織にも影響を与えた。NOW も、政治活動を優先する執行部の登場とともに、政党との連携を積極的に求め、「党派的な選挙政治への関わりが、その活動のレパートリーの重要部分になった」<sup>(12)</sup>のである。さらに、1974年の連邦選挙法の改正は、PAC (Political Action Committee = 政治活動委員会) の設立に関する規制を緩め、女性候補に女性 PAC が献金する道を開いた。

規制緩和を受けて、いくつかの女性 PAC が創設された。NOW, NWPC, BPW などの既存の女性組織が PAC を創り、また民主・共和両党の女性たちが共同して WCF (Women's Campaign Fund) を1974年に設

立した。しかし、女性 PAC の初期には、その資金や他のリソースは極めて限られたものだった。女性 PAC が、アメリカの選挙政治に大きな役割を果たすようになるのは、後述するように、1990年代初めに入ってからのことである。

## (2) 女性 PAC と選挙

1980年代の共和党は、レーガン政権の誕生とその再選を通して、保守化・右傾化を深めた。共和党の綱領は ERA 支持を削除し、レーガンは人工妊娠中絶へのアクセスを可能な限り禁じる方法を講じ、連邦最高裁判事に保守派を送り込んだ。さらに福祉予算を削減して「貧困の女性化」を深刻化させ、党内のフェミニストを孤立させた。

合衆国の行政府と司法の右傾化は、女性運動の目標をますます議会へと絞り込ませた。より正確に言えば、「議会に女性を選出する運動」に焦点が絞られたのである。NOW や NWPC, BPW など既存の女性組織の PAC は、ERA 支持や女性の人工妊娠中絶の「選択権」支持を表明する候補者への献金活動を既に開始していたが、この時期には、選挙活動を運動の中心に据えた女性組織や女性 PAC が誕生する。NOW の元会長エレノア・スミールは、1987年、FFM (Fund for Feminist Majority) を設立し、公選職を目指す女性たちのトレーニングを開始した。90年代に最大の女性 PAC に成長する EMILY's List (Early Money is Like Yeast) も1985年に設立され、以後の政治状況の展開とともに、これら女性組織の党派性はますます明確になっていくのである。

多くの女性 PAC が公式上は超党派を表明

しているのに対し、EMILY は、民主党の女性で選択権を支持し、ある程度競争力があると判断される候補者に限って、選挙序盤に献金する。EMILY の資金集めは、“bundling = 束ね方式” と呼ばれ、全米の有権者から効果的に献金を集める方法として注目された<sup>(13)</sup>。EMILY の献金総額は、後述する1992年の「女性の年」には620万ドルに達し、その後も増え続け、アメリカ国内最大の PAC の一つに成長した。この資金力は、いうまでもなく、民主党内における EMILY の影響力 - フェミニストの影響力 - を顕著なものにしている。

共和党支持のフェミニストも、EMILY に倣って、女性 PAC・WISH List (Women In the House and Senate) を設立した。WISH は、92年選挙では40万ドルを同党の選択権支持派の女性候補に献金し、党の右傾化と保守化に対抗した。EMILY と WISH は、党派性を鮮明にした数少ない女性 PAC である。

女性 PAC は、超党派かどうか、選択権支持を支援条件にするか、男女どちらも支援するか、さらに献金者が女性有権者かどうか、などでいくつかに分類される。既述したように、その多くは超党派的立場を公式上は維持してきたが、レーガン政権が右傾化を深めた80年代以降、女性 PAC による献金の対象は、民主党に大きく傾き、特に89-90年では、女性 PAC 全体の献金額の85%が民主党に集中した<sup>(14)</sup>。

## (3) 民主党への接近

共和党の反フェミニスト化が顕在化してくる70年代後半から80年代にかけて、NOW は、NWPC と共に民主党の全国党大会に参

加し、採択される綱領に影響を与えてきた。特に1980年の党大会では、連邦議員候補に対する政党支援に、ERAへの支持表明を条件にすることを主張して、再選を目指すカーター陣営と対立したが、最終的にはこれに成功して、以後ますます民主党との連携を深めていくのである。

しかし、NOWの内部には、選挙政治への傾倒に依然反対する勢力があった。82年の会長選挙では、選挙優先派のジュディ・ゴールドスミスが選出されたものの、反対派との票差はわずかであった<sup>(15)</sup>。僅差ではあったものの、ゴールドスミスの勝利は、NOWを民主党内部の大統領指名プロセスに深く関与させることになった。1984年の大統領指名選挙では、NOWはウォルター・モンデールを公式に支持し、党内での交渉力を強化した。NOWは彼に、副大統領候補として女性を選ぶよう迫り、ジェラルディン・フェラーロの指名に成功したのである。

一方、NWPCも初めて公式に党派性を明らかにし、84年の大統領選挙では、民主党のモンデール／フェラーロ支持を表明した。NWPC内には共和党支持者もいたが、大きな反対はなかった<sup>(16)</sup>。

この大統領選挙では、モンデール／フェラーロが破れ、NOWは、民主党との関係を再評価する必要に迫られた。よりラディカルな戦術に復帰すべきだと主張したエレノア・スミールが新たにNOWの会長に選出されたが、民主党に代わるルートを見つけることは困難だった。結局1988年の大統領選挙でも、NOWは民主党と共にあったが、綱領変更のためのロビイングや党大会でのラリーなど、その参加のレベルはかなり限定されたも

のとなった。さらに、ブッシュ大統領が選出され、共和党政権がさらに4年間継続することが明らかになったため、NOWの活動はいっそう沈滞した。

1989年のNOWの大会では、「二大政党は女性のニーズに答えていない」という批判から、新党結成の可能性を探る決議案が満場一致で採択された。リーダーたちは全米各地で公聴会を重ね、フェミニストばかりでなく、環境保護や市民権、平和運動などの活動家を含む、広範な連携をもとにした新党結成が模索された。しかし、他の女性組織からの支持は得られなかった。NOWのこの決定が、これまでの運動からの逸脱とみられたからである。新党結成の試みは挫折し、またこの「逸脱行為」のために、NOWは民主党内でも急速に影響力を低下させた。1992年の民主党の党大会では、NOWはあえて会場の外に留まる決定を行ったのである。

#### (4) クリントン政権と女性

12年間の共和党政権は、女性組織の多くを民主党支持へと動かした。1992年の大統領選挙では、メンバーに多くの共和党支持者を抱えるBPWさえ、民主党のクリントン候補への支持を表明した。BPWのPACから民主党へ渡った献金の割合も、80年の69%から94年には93%に増大したのである。このように、民主党大統領候補クリントンは、全米のフェミニストの支持を獲得するのに、なんの困難もなかった。

同じ1992年は、“the Year of the Women = 女性の年”としてアメリカ選挙史上に記録をとどめている。当時のブッシュ大統領によって連邦最高裁判事に指名されたクラレン



ス・トーマスには、セクシャル・ハラスメントの疑いがあったが、これを審議する上院司法委員会の公聴会の様子が全米に放映されるや、女性有権者が激怒し、この怒りが連邦議会に史上最多の女性を選出する直接の契機になったことはよく知られている。公聴会直後から女性PACへの献金が増大したこと、地方や州レベルで候補者予備軍の蓄積が進んでいたこと、引退する現職議員が例外的に多かったことなど、様々な要因が重なり、「女性の年」を実現させたのである。しかしながら、この「女性の年」は、より正確には「民主党の女性の年」であった。なぜなら、これらの女性たちに対する献金の多くは、民主党のみに献金する女性PACによるものであり、また初選出された女性の大多数も民主党だったからである。

クリントン政権に対するフェミニストの評価は、特に高いわけではない。たしかに、女性閣僚の任命や選択権の擁護、「女性に対する暴力禁止法」「育児介護休業法」への支持など功績も多いが、健康保険政策の失敗や、共和党主導の福祉改革案への妥協、軍隊における同性愛者問題への対応などは、多くのフェミニストを失望させた。1996年のクリントン再選選挙では、著名なフェミニストの中には、クリントンが民主党内のリベラル派を切り捨てたと批判して、環境保護運動の活動家、ラルフ・ネーダーを支持すると公言するものも出現した<sup>(17)</sup>。

他方、1994年の中間選挙の結果、上下両院で共和党が多数派となり、下院議長ギングリッジが推進する財政・社会的保守主義に、フェミニストは危機感を強めた。94年選挙では、民主党に投票するはずの女性有権者の棄

権が共和党の勝利につながったと分析され、96年の大統領選挙では、票の掘り起こし、有権者登録の推進が女性たちの活動の中心になった。EMILYも候補者への献金活動だけではなく、女性票の掘り起こしにも積極的に関与し、“Women, Vote!”キャンペーンを展開した。96年に開かれたNOWの大会では、選挙政治への回帰が決議された。NOWは上下両院の選挙で特定の選挙区を選び、集中的かつ攻撃的な戦略を展開したのである。

96年選挙では、クリントンが再選されたものの、上下両院では共和党支配が継続することになった。共和党が反フェミニスト的立場を強固に維持している限り、フェミニストたちは、クリントンと民主党を支持するほかなかった。クリントン政権二期目の後半の多くは、ホワイトハウスの実習生をめぐるスキャンダルに浪費されたが、NOW、FFM、NWPCをはじめ多くのフェミニスト組織は、クリントンを擁護し、弾劾を阻止するための強力なロビイングを展開した。二大政党の、フェミニスト・イシューをめぐる「二極化」のもとでは、クリントンの行状がどうあれ、彼を擁護する以外の選択はなかったのである。アメリカの二大政党制は、女性運動のオプションと可能性が、現実には極めて限られたものであることを示したといえよう。

### おわりに

以上みてきたように、選挙政治・政党政治への積極的参入は、1980年以降のアメリカの女性運動の戦略の中核をなしている。ヨーロッパ諸国では、政党の女性たちが、党内で、女性の地位向上と議会への進出を要求し成功してきたが、アメリカの女性運動は、あ

くまで政党外部にとどまり、プレッシャー・グループとしての機能の中に、女性の議会進出と政策実現の戦略的有効性を見出してきたのである。

二大政党が政策をめぐる競合関係にある場合には、たしかにこの戦略は有効であろう。どちらからも効果的に譲歩を引き出すことが可能だからである。しかしながら、既にみたように、アメリカの政党は、イデオロギーにおいても政策においても激しく対立し、二極化が進行している。このような状況下で民主党への一体化を強めれば、クリントン擁護で迫られたような苦渋の選択に、再び遭遇する可能性は否定できない。プレッシャー・グループとしての有効性を担保できる運動の活路を見出すこと、そのための新たな戦略の構築が、アメリカのフェミニズムには求められている。

付記 本研究は、平成13年度北海道浅井学園大学特別研究費の交付を受けた。

#### 註及び引用・参考文献

##### 註

- (1) Susan Tolchin and Martin Tolchin, *Clout: Women Power and Politics*, McCann & Geoghegan, 1971, p.13.
- (2) Lisa Young, *Feminists and Party Politics*, University of Michigan Press, 2000, p.4.
- (3) Jill Vickers, "Coming up for Air: Feminist Views of Power Reconsidered," *Canadian Women's Studies* 2(4), 1980, p.67.
- (4) Denise Baer and David A. Bositis, *Elite Cadres and Party Coalitions: Representing Public in Party Politics*, Greenwood, 1988,

p.89.

- (5) Maurice Duverger, *Political Parties*, Wiley, 1954, p.160; Roberto Michels, *Political Parties: A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy*, Crowell-Collier, 1962, p.182.
- (6) Lisa Young, *Feminists*, p.6.
- (7) Ginette Castro, *American Feminism: A Contemporary History*, New York University Press, 1990, p.6.
- (8) Lisa Young, *Feminists*, p.32.
- (9) *Ibid.*, p.33.
- (10) Marcia Cohen, *The Sisterhood: The Inside Story of the Women's Movement and the Leaders Who Made It Happen*, Columbine, 1988, p.316.
- (11) Lisa Young, *Feminists*, p.34.
- (12) Maryann Barakso, *Playing with Fire? Social Movements and Electoral Politics—The Case of the National Organization for Women*, Paper presented at the 1996 APSA Annual Meeting.
- (13) EMILYの集金方法については、相内真子「アメリカにおける女性の政治的補充：連邦議会の場合」北大法学論集 45-1・2, 1994, pp.237-278参照。
- (14) Lisa Young, *Feminists*, p.47.
- (15) Myra Marx Ferree and Beth B. Hess, *Controversy and Coalition: The New Feminist Movement*, Twayne, 1985, p.118.
- (16) Lisa Young, *Feminists*, p.48.
- (17) *Ibid.*

### その他の参考文献

Freeman, Joe, *A Room at a Time: How Women Entered Party Politics*, Rowman & Littlefield, 2000.

Freeman, Joe, "Feminist Activities at the 1988 Republican Convention," *PS Political Science & Politics, March*, 1989.

Hartmann, Susan M., *From Margin to Mainstream*, Knopf, 1989.

Lovenduski, Joni, and Pippa Norris, eds., *Gender and Party Politics*, Sage, 1993.

Simon, Rita J., and Gloria Danziger, *Women's Movements in America: Their Successes, Disappointments, and Aspirations*, Praeger, 1991.

Feminism and Partisanship :  
The Women's Movement and Political Parties in America

Masako AIUCHI

**ABSTRACT**

The contemporary feminist movement in America has moved up to the political arena, with the tenet of equal participation in the mainstream of the society. From 1980 on, electoral and party politics became an increasingly central strategy of the movement. The polarization of the American two parties over ideology and policies led women to more close ties with the Democrats. The alliance, however, forced women to compromise in the incident of the Presidential Impeachment. The alternative strategy for political women has not yet been found.

**Key words** : feminism, electoral politics, political parties, partisanship